

題 目 日本におけるポピュラー音楽（1968～2024）の進化—機械学習による音響特徴量の解析—

氏 名 中澤禅

指導教員 竹澤正哲

ポピュラー音楽をめぐる研究領域は、質的・記述的研究として豊かな蓄積を有している一方で、その多くは限られた作品や事例を対象とし、研究者の聴取経験や理論的枠組みに依拠した議論にとどまりやすいことも指摘されてきた。こうした背景のもと、録音技術と計算資源の進歩により、楽譜や音源といったデータを大規模に扱い、長期間にわたる定量的分析を可能にする音楽情報処理（Music Information Retrieval; MIR）分野への注目が高まっている。本研究は1968年から2024年のオリコン週間シングルチャートに掲載された楽曲を対象に、音源から抽出した音色・音高特徴量を機械学習によって定量化し、日本のポピュラー音楽が音響的なレベルでどのように変化してきたのか、多様性がどのように推移してきたのか、そして革命点がどこに現れるのかという三つの問いを検証する。Mauch et al. (2015) の手法に倣い31,975曲の音源から音色を表す特徴量と音高を表す特徴量を抽出し、連続値から離散値に量子化する。これらに対して潜在ディリクレ配分法（Latent Dirichlet Allocation; LDA）を適用して音色トピック8種、音高トピック8種を生成し、各楽曲をトピック分布で表現した。さらにトピック分布を統合してスタイルクラスター、多様性指標、新規性スコアを算出した。分析の結果、音高トピックではメジャーコードの持続を中心とする型が全期間で優勢であり、1970年代を境にマイナー中心の歌謡曲的進行が減少し、1980年代以降はマイナーセブンスを多用するR&B・ダンス系の進行が増加した。音色トピックでは、1960年から1970年代の穏やかなアコースティック優勢から、1980年から1990年代のロックサウンドやシンセと強いビートを伴う傾向へ移行し、1990年代以降は女性ボーカルやアイドル、アニメソングに対応する特徴が拡大した。多様性は1970年代半ばまでに大きく上昇した後、高い水準で推移し、革命点は1970年代半ば、特に1976年前後で新規性が最大となった一方、以後の変化は断絶というより既存スタイルの構成比の再編として現れた。本研究の課題は、オリコン上位曲とYouTube音源というデータ範囲による欠損・誤取得の影響、使用した低次特徴量と分析方法の枠内では可能な解釈に限界があることなどが挙げられる。今後の展望としてはほかの分析方法による解析、リズム・旋律特徴の導入、配信データや他国チャートとの比較、質的研究との接続が期待される。